豊かな国際感覚を身に付けた子どもたちの育成

前カラカス日本人学校　教諭
静岡県静岡市立西奈小学校　教諭　大　長　康　浩

キーワード：国際理解教育、異文化理解、自国文化理解、国際交流活動

１．はじめに

カラカス日本人学校は、世界の中でも子どもの数が少ない日本人学校の１つであり、平成26年度に在籍していた子どもの数は、６名である。子ども数の減少傾向の要因は、治安悪化や生活品不足等のベネズエラが抱える諸問題により駐在員の家族帯同が敬遠されているためと考えられる。このような厳しい状況であっても、海外における日本人学校の意義は大きい。海外という不自由な環境の中にあっても、子どもたちは、年齢差を感じさせないほど仲良く、友達と励まし合いながら学習や運動、学校行事などに一生懸命取り組んでいる。

私は、平成24年度から３年間研修担当として、現地校との国際交流を中心に実践を行ってきた。これまでに、ベネズエラにいるからできることを授業や特別活動に取り入れたり、ベネズエラ人とのかかわり合いをもっと深めることができるように現地校との国際交流の機会を増やしてきた。この根底には、いずれ日本に帰国する子どもたちに、このベネズエラの生活や文化の良さをたくさん知って欲しいという願いがあったからだ。

そこで、日本とベネズエラの相互理解ができる力を子どもたちに身に付けさせるために、実践してきた活動を紹介したい。

２．生活科・特別活動の年間カリキュラムの作成及び実践

子どもたちに異文化理解への興味・関心を高めるために、異文化理解につながる学習内容を積極的に取り入れていくことが、国際感覚を高めていくための第一歩である。そのためには、年間カリキュラムが必要不可欠であり、子どもの実態や地域性を踏まえ、学校の特色を生かしながら年間カリキュラムを作成していくことが重要になってくる。しかし、海外での異文化理解につながる教材開発は、思っていた以上に困難であった。まったく未知の環境での情報・資料を収集していく難しさ、ベネズエラ人とコミュニケーションを深めていく大変さ、安全面のことを念頭に置き大使館との連絡調整をしながら活動を実施できるか否かの判断をする慎重さなどが、常に目の前に立ちはだかったのである。海外勤務１年目・２年目は、満足のいく成果を残すことができなかった。

そして、ようやく私自身が海外勤務２年間の経験と環境に適応できるようになった３年目に、初めて異文化理解につながる年間カリキュラムを１年間を通じて修正・改善しながら作成することができた。これまで実践してきた単元の内容や活動計画案については、派遣教員や現地スタッフと協力し合い協議を繰り返し、共に共通理解した上で取り組んできた。実践後は、活動の振り返りを行い、見直し、修正をしながら昨年度まで継続してきた活動に新しい内容を取り入れたり、初めて行う活動も計画・実践したりすることができた。

３．子どもたちの身近なものから出発する異文化理解

低学年から、異文化理解及び自国文化理解に関する体験活動を積極的に取り入れ、国際的視野を広げることが国際感覚を豊かにしていくことだと考える。異文化や自国文化に触れることで、自分の身近な生活や社会との関わりに興味・関心をもつことができる。低学年の発達段階から考えると、遊び・食べ物・動植物・音楽などの体験型の学習テーマが取りかかりやすいと言える。そして、異文化と自国文化について相互に理解を深めていく上で絶対に必要になってくるのが、異なる文化を持つ人々との国際交流を行う場である。この国際交流の場を継続的に体験活動に取り入れながら、国際交流に必要な力を伸ばしてきた。

(1) 校外学習

校外に出てベネズエラについて学習する機会は、25年度までは年に1回計画されてきた。26年度は、さらに子どもたちに自然体験や動物とのふれあい体験を通して、ベネズエラについてより理解を深められるように2学期に第2回校外学習を行い、年間2回実施した。主な活動は、アビラ山のロープウェイ乗車体験、山頂でのネイチャーゲームとスペイン語による買い物ゲーム・乗馬体験である。学校では実施しにくい学習が、今回の校外学習の中に多く計画することができたので、子どもたちは校外学習をとおして、校歌にも名前が登場する身近なアビラ山の植生を知ること、生き物を可愛がる優しい心を育むこと、友達と協力して楽しく活動することなどができた。また、保護者にも参加していただき、親子の絆を深めるよい機会となった。

(2) 音楽鑑賞会

カラカス日本人学校に音楽活動の専門家を招待してベネズエラの音楽鑑賞をする機会は、私が在勤中の3年間で26年度が初めてとなった。ベネズエラでは、「エル・システマ」という、政府支援のもと、子どもたちに無償で音楽教育をする活動が行われており、世界でも注目を浴びている。そこで、子どもたちに、ベネズエラで活躍する音楽家を招待したり、音楽専門の学校を訪問したりして、ベネズエラの音楽を鑑賞する機会を設定した。この機会は大変貴重なので、保護者や在留邦人の方々にも参加を募った。子どもたちは、口笛とは思えない美しい音色の響きや、同世代の子どもたちが奏でる管弦楽器の演奏を興味深く聴いていた。音楽鑑賞を通じて、一人ひとりの感性で異文化理解を深めることができた。

(3) 運動会

運動会は、ベネズエラで生活しているベネズエラ人や在留邦人及び日系人が、スポーツを通して地域社会のコミュニティーに対する理解を深める大事な行事である。交流学習を続けている現地校の子どもたちや教職員の参加者も年々増加しており、運動会は国際交流の場となってきている。そのような場で、本校の子どもたちは毎年団体演技を多くの方々に発表してきた。内容も、ベネズエラの音楽や日本の民謡などを取り入れ、演技をとおして文化交流の側面も兼ね合わせてきた。26年度は、子どもたちの演技を発表するという案から、運動会に参加している全員とベネズエラの踊りと日本の盆踊りを一緒にするという発想で、子どもたちは400人の参加者と一緒に踊りを楽しむことができた。ベネズエラ人や在留邦人の方々からたくさんの拍手をもらい、日本では味わうことのできない貴重な体験をすることができた。

運動会で参加者と一緒に踊る様子

4. 子どもたちの興味・関心に重きを置いた自国文化理解

(1) 全校学活

26年度から学活の時間に全校学活という時間を設け、全校集会や楽しい集会などを盛り込んだ年間指導計画を立てて取り組んできた。楽しい集会には、日本の季節感を意識して秋のスポーツや読書といった集会だけでなく、海外にいても子どもたちに知っていて欲しい、体験して欲しい日本の年中行事の集会も取り入れてきた。

6月	7月	9月	10月	1月	2月	3月
日本の昔遊び	七夕集会	スポーツ集会	読書集会	お正月集会	節分集会	進級を祝う会

(2) もちつき大会

海外においても日本にいる時と変わりなく日本の楽しい行事を子どもたちに体験させたいという願いは、教職員だけではなく保護者も同様である。そのため、保護者は、学校への教育活動に労力を惜しまず、積極的に協力してくれている。特にもちつき大会は、子どもたちだけではなく多くの来賓客も招待して行われている。そのた

め、保護者はもち米を日本から取りよせたり、大会前日までに学校に来て下準備したりするなど、大変な作業であった。

子どもたちは、親への感謝の気持ちを改めて感じながら、自分たちでついて、丸めたおもちを食べ、日本の文化を体験することができた。

5．国際交流活動の実践

(1) 学期毎に 1 回の定期的交流を継続してきて、絆が深まってきた現地校交流学習

平成17年度より本校の近くにある現地校のマリア校と毎年 1 回の交流学習（訪問学習）を行っていた。しかし、25年度からは、新しい取り組みとして交流学習を年間 3 回に増やし、マリア校の子どもたちを本校に招待してスポーツ交流や国際文化交流を積極的に行っている。26年度度も、マリア校との交流学習は国際交流活動の重点に位置づけ継続して取り組んだ。

①第 1 回交流学習（マリア校の子どもたちを本校へ招待）

26年度最初の交流学習では、体を動かしながら自然にマリア校の子どもたちとかかわり合えるスポーツ交流を行った。前半は、鬼ごっこやリレーなどを行い、後半は、運動会と同じ紅白 2 組に分かれて玉入れと綱引きを行った。最後に、日本の新聞紙で作った兜をマリア校の子どもたちにプレゼントした。スポーツをとおして、緊張感がほぐれていき徐々に言葉の壁が消えていくと、マリア校の子どもたちに、じゃんけんのやり方を教えたり、友達の名前を呼んで応援したり、勝ったときに一緒に喜びあったり、子どもたちは夢中になって楽しく交流する姿に変わっていった。大人たちと違って、子どもたちは頭より体や心で国際感覚を豊かに身に付けていることがわかった。

②第 2 回交流学習（マリア校を訪問）

2 回目の交流学習は、子どもたちがマリア校へ訪問して、通常授業の体験とお互いの国の文化交流の発表を行った。本校では、異文化理解の一環として英語・スペイン語の語学学習を週に 2 時間行っている。普段の学習の中で身に付けたスペイン語力を試す絶好の機会が、この訪問による交流学習である。通常授業体験では、図工で「ベネズエラのこま作り」を体験した。子どもたちは、多少の緊張感はあるもののマリア校の子どもたちや先生に作り方を教えてもらいながら、楽しく活動することができた。また、マリア校の子どもたちに、日本の新聞紙で折った紙鉄砲をプレゼントした。その際、紙鉄砲の折り方をスペイン語で知っている言葉やジェスチャーなどを交えながら教える姿が見られた。文化交流会では、両国国歌を斉唱後にベネズエラの伝統的な踊りと日本の和太鼓の発表をお互いに鑑賞し、最後はみんなで一緒にクリスマスの歌を合唱した。子どもたちは、緊張しながらも、自己紹介や授業に一生懸命取り組むことができた。交流学習は、子どもたちの異文化理解や自国文化理解が深まり、コミュニケーション能力を高めていくために効果的な学習であった。

一緒に工作を楽しんでいる様子

③第 3 回交流学習（マリア校の子どもたちを本校へ招待）

3 回目の交流学習は、マリア校の子どもたちを日本人学校の授業に招待し、お手玉やけん玉をして文化交流を行った。その後、スペイン語劇「3 匹の小豚」と和太鼓をマリア校の子どもたちに見てもらった。子どもたちのスペイン語は確実にマリア校の子どもたちに伝わり、拍手喝采を浴びた。年間を通して 3 回の交流学習を行い、両校の子どもたちは心から交流を楽しむことができた。現地校を訪問したり、学校へ招待したりして行ってきた国際交流活動は、子どもたちの異国文化理解を深めるとともに自国文化理解を高めることができた。文化や習慣、教育の違いを肌で感じながら、子どもたちの国際感覚をさらに磨くことができた有意義な交流学習であった。

(2) 子どもたちの身近な現地従業員をゲストティーチャーにした生活科の実践　―「ベネズエラの遊びをしよう」

子どもたちは、ベネズエラの幼稚園に通っていた経験があるので、ベネズエラの遊びもいろいろ知っているように思えたのだが、実際は2~3種類の遊びしか知らなかった。そこで、子どもたちはベネズエラの遊びを知るために、現地従業員にインタビューして、聞き取り調査をした。調べていくうちに、子どもたちから、「あ、日本でいう鬼ごっごだ。だるまさんがころんだだよ」と、日本の遊びと同じ遊びがたくさんあることに気が付いていった。子どもたちにとって遊びを通して、身近なベネズエラの生活文化に触れることは国際感覚の育成につながるという考え方から、現地従業員が子どもの頃によく遊んだ遊びを教えてもらった。子どもたちは、現地従業員と一緒にやりたい遊びを選び、いろいろな遊びを体験することができた。活動に入る前に、必ず「今日遊ぶのは、日本の遊びとどこが似ていて、どこが違うのかな」という課題をもたせた。現地従業員による遊びの説明は全てスペイン語だが、遊び方は身振り手振りなどを交え手本を示しながらやってもらったので、子どもたちはその様子を見ながら自然と遊び方を理解していった。子どもたちからは、すぐに「動いた人は、鬼と手をつなぐんじゃなくて、すぐに鬼と交替するんだ」「日本とは違うよね」と遊び方の違いに気付き、つぶやきの声が聞こえてきた。遊び方も簡単なので、すぐに遊びの輪に入っていった。　遊びを教えてもらい、どの遊びも夢中になり、自分たちで何度も現地従業員と遊び、どうすれば勝てるのか、どうやったら上手にできるのかを考えるようになった。学習のまとめとして、子どもたちが楽しかった遊びの絵や遊び方をまとめたベネズエラの遊び紹介カードを作成して、教室に掲示した。

6. おわりに

海外勤務3年間を振り返ってみると、3年目にして生活科及び特別活動において、年間を通じて発達段階に応じた継続性のあるカリキュラムを作成することができた。また、それに基づいた異文化理解及び自国文化理解につながる教育活動も年間を通じて実践することができた。このように計画→ 実践→ 評価（修正・改善）というサイクルで行えたことが大きな成果である。異文化理解及び自国文化理解の教育活動は、遊び・食べ物・動植物・音楽など、子どもたちにとって身近なものを学習テーマにして、興味・関心に重きを置いた体験学習を実践してきた。子どもたちは、本物体験を体の五感で感じ取りながら意欲的に取り組むことができた。

私が一番力を入れてきた25年度からの学期毎に1回の定期的交流を始めた現地校交流学習が、26年度も継続して取り組めていることが大きな前進である。このことによって、子どもたちの態度に変化が見られるようになってきた（物怖じしなくなった、友達ができた、自信をもって自分の思いを表現できるになった、また一緒に遊びたいという意欲が出てきた)。また、子どもたちにとって、ごく身近な存在である現地従業員との交流機会を増やしたことも、異文化を持つ人々とかかわる事で、以前に比べて積極的な態度に変わってきた一因と考えられる。

今後も様々な体験学習を行っていく中で、子どもたちに付けさせたい力を明確にして指導計画を作成していくと同時に、子どもたちがどのように成長したのかを把握できる指導評価の改善が必要である。そして、子どもたちが異文化理解や自国文化理解で深めたことを、今後はさらに日本人や異なる文化を持つ人々に発信するような機会を設け、自分の考えを表現できる力を伸ばしてくことが大切である。

最後に、カラカス日本人学校で国際理解教育を進めるにあたり、共に汗水を流した派遣教員や現地スタッフの力、全面的に教育活動をサポートしていただいた保護者の支えがあったからこそ、子どもたちの安全を確保して有意義な学習をすることができた。カラカスでお世話になったたくさんの方々に心から感謝している。